

口語詩句 10月 龍 秀美 202410

<総評>

投稿者の方々の口語詩句に対する態度はさまざまです。はっきりとご自分の作品を既成のジャンルである俳句や短歌などと自覚して投稿される方もありますし、相互乗り入れや、この場でないとできない新しい試みをされる方も。選者としては常に刺激をいただいております。

どうやって耐えてきたのと問われ  
手のひらは青々とした木陰

---

桜望子 山形県  
——手のひらというものの優しさが、それが作る木陰の永遠性に現れている。

寝台特急月光浴びて鰐欲しがる

---

長谷川柊香 宮城県  
——深海を音もなく進む生物としての列車。

なのはなの新芽を  
なでてゆくように  
きみがはじめて下の名を呼ぶ

---

さいう 石川県  
——そっとそっと触れる仕草の初々しさの新鮮さ。

祖母の骨  
ひろう  
右手のよどみなく  
思慕は五感のようにあやうい

---

さいう 石川県  
——右手の仕草は身体としての確かさだが、心の動きである思慕は明確なかたちを取れないで漂う。

人間も虹を架ける だが飽きる

---

李いう子 佐賀県

——政治、文化、科学などの虹を架けることはできる。それは人間の偉大さだが、それもいつか移ろっていくだろう。空に架かる虹の夢い自然の確かさと対照的だ。

世界が小さく見えるとき

自分の言葉を信じちゃだめだよ

---

いまはじまるの 兵庫県

——心の自由さを失ったとき、世界は小さく見えるのだろう。

新しい校歌二番に「タワマン」と

入れるかどうか揉めている村

---

マズルカ 山口県

——新しい言葉はいつの時代でも取捨される。定着するものは、そのうち何パーセントだろう。

秋の夜

煙突のあるクリニック

---

日下部 友奏 群馬県

——何のためにある煙突なのか。メルヘンチックな怖ろしさを感じる。

A T Mの口すぐ閉じて冬薔薇

---

有野 水都 東京都

——うっかりすると閉まってしまう機器のスピード。変わらず開く薔薇の静かさ。

いちじくのパフェに

ざらりと笑みふたつ

---

太代 祐一 神奈川県

——熟れると自ずから割れる果物は、どれも少し笑っているようで不気味だ。

追熟のゆきすぎた実を放置する  
そういうふうに傷つけていた

---

羽水繭 大阪府

——未熟といい、不熟というが、見極める時期は難しい。

お墓にも小さいリボンつけておく

---

桜庭 紀子 和歌山県

——かつて生きた人の息遣いをリボンに籠めて。

チエロの弓立てかけたまま滅ぶ星

---

秋山颶汰朗 群馬県

——生物のささやかな営みと地球の悠久の時間は等価かもしれない。

崖自身

すみれを見ては死ぬべきかと

---

宮崎 莉々香 神奈川県

——不意に現れる自分の姿を見るような驚き。崖である自分とすみれである自分。

おもいでに火を灯したら蛇花火

---

塩見 佯 沖縄県

——止められない勢いで溢れだす思い出もある。

「かぼちゃの離乳食たらふく」  
のあくび

---

赤坂 仁郎 石川県

——赤ちゃんの可愛さが極まる。

ピリオドのことが  
嫌いだカンマ come

---

関野 悠他 京都府

——ピリオド（読点）を使わず、カンマ（句点）は使うという現象が最近多い。「マルハラ」というらしい。それをあっけらかんと表現した。

紫色のインク

指紋に沿って

古代の日暮れ

に惑う河水

---

薬師丸怜央 千葉県

——指紋という動かせない個人の存在が、時間や空間を越えた幻想を呼ぶ。